

6. きらめく動物たちの命と海 【久保田信の白浜だより(その42)】

ハダカイワシ類の定期的な漂着

和歌山県白浜町京都大学瀬戸臨海実験所“北浜”に、2010年以来、毎年ゴールデンウィークのころになるとハダカイワシ類の一種であるアラハダカが定期的に漂着する。魚種は京都大学の中坊徹次先生に査定していただいた。特徴として、目の白目の部分に三日月状の組織がないこと、体の背縁に発光器がないこと、尾びれの直前に並ぶ発光器の数が2個であること、肛門上発光器列が少し折れ曲がること、鰓蓋上端は丸く滑らかであることなどが挙げられる。

本種は全世界の外洋の水深200 m以深に生息する。昼間にはこのような深みに生息しているものの、夜間になると表層まで浮上する。この垂直移動は餌を追っての行動である。アラハダカは日本列島では太平洋沖の少し北よりに分布している。

そのアラハダカは、白浜町沿岸には1年にたった1度きり漂着する。ハシボソミズナギドリの渡りの受難の漂着時期とたまたまだぶっているので印象深い。アラハダカの漂着は1996年にも友人の新稲一仁さんが同じ時に漂着した個体を収集していた。以前からこのような現象は起こっていたのだろう。これらの全個体は京都大学総合博物館に大切に保管されている。

ハダカイワシ類はウロコがすぐはがれるのでそのような名前がつけられている。しかし、アラハダカではそんなことは起こらないので、ちょっと変わった種である。ハダカイワシ類の中では表皮や鱗が強い種といえよう。

しかし、昨年の2012年11月初旬に、初めてのことが、これまでの記録と半年も異なる時期に本種が京都大学瀬戸臨海実験所“北浜”に漂着した。その個体は標準体長が58 mmほどで、これまでに記録された個体より20mmほどこぶりであった。こういった漂着の理由はわからないが垂直移動に失敗した個体かもしれない。そして、1年に2度、半年ごとにこのような漂着が今後も起こるものなのか継続調査が望まれる。



図 2012年5月11日に和歌山県白浜町京都大学瀬戸臨海実験所“北浜”に漂着したアラハダカ